

序

故向井俊彦先生は、一九六七年に京都大学文学部哲学科を卒業され、続いて同大学院文学研究科修士課程・博士課程へと進み、七六年三月に単位取得進学をされています。と同時にその翌月、立命館大学経済学部助教授として着任され、九〇年に同学部教授、また、九三年からは、文学部教授に就かれ、ご逝去されるまで、立命館大学に三〇年間お勤めになりました。当時の文部省への学科申請の関係で、文学部にこられてから四年間、理工学部教授として配属にいられた時期もありました。三〇年にわたる立命館でのご勤務において、向井先生は教育科学研究所長、総合基礎教育センター長をそれぞれ三年間歴任され、重要なお働きをされました。また、学外でも京滋地区私立大学教職員組合連合書記長や日本科学者会議京都支部事務局長などを務められ、教育の現場や組織の要となるお仕事に誠実さと熱意をもって取り組まれました。

一方、ご研究においても、京都大学時代に野田又夫、辻村公一両先生から指導を受けられ、主に、唯物論の立場からのヘーゲル研究を一貫して進めてこられました。その成果は、主著『唯物論とヘーゲル研究』（文理閣、一九七九年刊）にまとめられ、その後も唯物論研究を中心にごくれたご論考を発表されておられました。さらに、一般教育や生涯学習、高等教育に関してのご論文も、その役職に就かれたことから、多く公にされました。

近年、文学部がおし進めてきた学部教学改革に、先生は積極的に加わり、専攻横断的な学びであるテーマ・リサーチ型ゼミナールをご担当になられ、「他者問題と文化理念」というテーマでゼミを開講されました。そのゼミで卒業論文を書いた学生たちと、卒業式の日にご記念の写真撮影をされた時には、先生はすでに病魔に冒され、病院から特に許可を得て式に参列されていたことを、私たちはあとで知りました。

それから二か月も経たない二〇〇六年五月十四日に、先生は、六二歳という、現代においては早すぎる年齢でその生涯を閉じられたのです。まだ、教育者・研究者として、また、大学人として現役であり、その集大成をなされるまさにその時にその生を終えられたのです。ご家族、ご親戚、研究や教育を通してのお仲間、それに私たち同僚といった先生を知る者たちは、先生のご逝去に衝撃と悔しさと悲しみ

とを深くおぼえました。それ以来一年八か月が経とうとありますが、こうした気持ちは今も心のうちに残っています。

学校法人立命館は、向井先生に長年の立命館大学に対してのご貢献を讃え、名誉教授の称号をお贈りいたしました。またこの度、本会は、先生のご功績と学恩とに深い謝意を表し、先生にゆかりある人たちの論考でもって論集を編み、先生に献呈いたします。あらためて、心より先生のご冥福をお祈り申し上げます。

二〇〇八年一月

立命館大学人文学会会長

文学部長 木 村 一 信